

令和5年度第6回考古学講座

近年の調査成果からみる^{たかくらぐうけ}高座郡家の様相
～^{しもてらおかんがいせきぐん}国史跡下寺尾官衙遺跡群～

茅ヶ崎市教育員会 加藤大二郎

下寺尾官衙遺跡群とは

神奈川県茅ヶ崎市で見つかった約1300年前の役所や寺の遺跡で、平成27年3月に我が国の歴史に欠かせない遺跡として、国から史跡に指定されました。指定されるまでの発掘調査によって、役所は当時の税を納めるための正倉という高床式倉庫が4棟以上並んでいること、政庁である正殿、正殿を囲む東脇殿、後殿が存在すること、政庁と正倉の間に^{たち}館・^{くりや}厨と想定される建物群が存在していることがわかりました。これらの施設が存在する範囲を高座郡家としてとらえています。

高座郡家の南西に^{しもてらおはいじ}下寺尾廃寺（^{しちどうがらんあと}七堂伽藍跡）と呼ばれる郡家と同時期の寺が見つっています。今から45年前に初めて発掘調査が行われ、寺院跡であることが明らかになりました。その後主要な建物や寺院の範囲を明らかにするための調査を行い、約80m四方の堀に囲まれた2つの建物址を見つけることができました。2つの建物は金堂と講堂と推定されています。堀の中を全面発掘調査しておりませんので、まだ堀の中に建物が存在する可能性があります。

高座郡家と下寺尾廃寺の周囲には小出川と駒寄川が流れています。郡家・廃寺の北東から南西に流れ、相模川の河口付近で合流する小出川、東から南西に流れ小出川に合流する駒寄川に囲まれるようにこれらの遺跡は存在しています。

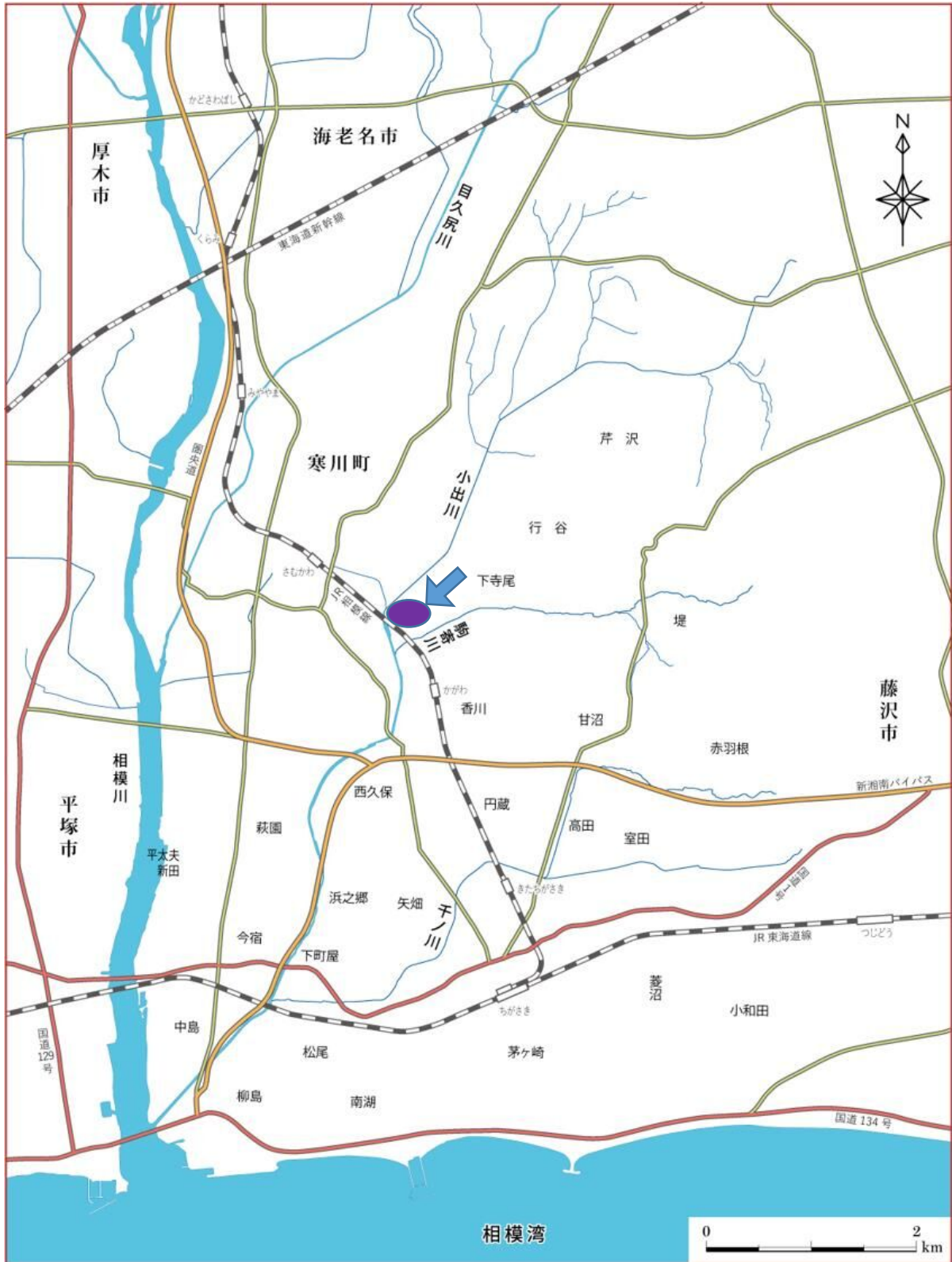
廃寺近くで見つかった駒寄川の旧河道からは、多くの祭祀の痕跡が見つかり、祭祀場と考えられています。また、遺跡のすぐ西側で小出川が屈曲する部分では、内側に水を引き込み、護岸工事がされた船着き場が見つっています。船着き場である川津の近くにも祭祀を行った場所や、荷ほどもき場であったと考えられる建物群が見つっています。

下寺尾官衙遺跡群は、限られた範囲に役所、寺、祭祀場、船着き場がそろって見つかり、地方官衙の様相をうかがうことのできる貴重な史跡です。

今回は指定後からこれまでの約9年の間に行ってきた高座郡家の発掘調査成果から、わかってきたことや新たな謎についてお話したいと思います。



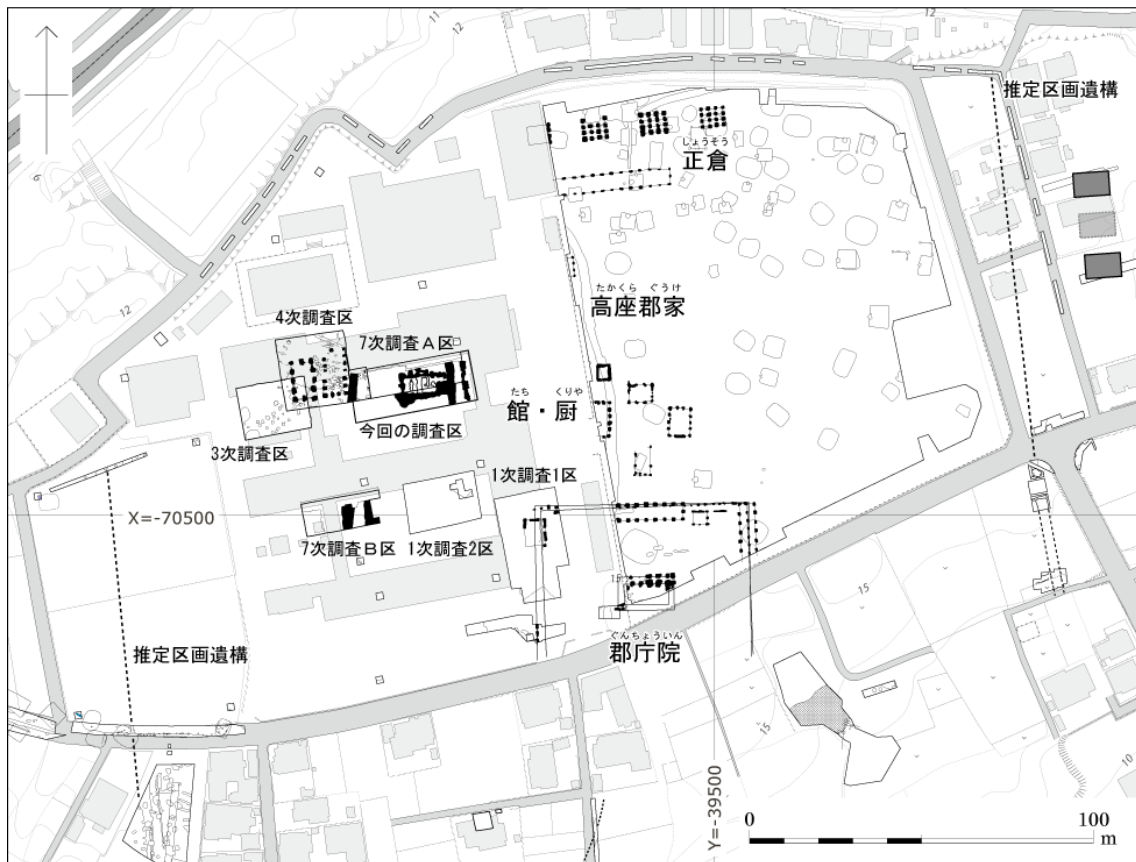
墨で土器に書かれた文字「厨」



下寺尾官衙遺跡群の位置



下寺尾官衙遺跡群の主な遺構



高座郡家で発見された遺構

指定までに把握できた高座郡家の様相

高座郡家は、相模国高座郡の郡家に比定されています。高座は現在「こうざ」と読まれています。文献で見られる万葉仮名から、古代には「たかくら」と読んでいたと考えられるため、「たかくらぐうけ」と呼称しています。

県立茅ヶ崎北稜高等学校の建て替えを目的として行われたグラウンド部分での発掘調査によって、郡家が存在することが明らかになりました。

グラウンドの南西端において、郡家の中心に正殿、正殿を取り囲む東脇殿と後殿が確認されました。脇殿や後殿と異なる時期には塀が存在していたと考えられています。西脇殿が存在すると思われる位置には校舎が存在し、正殿の南側は道路が存在しています。

グラウンド北端には東西に4棟正倉が並んで発見され、正倉の南側には東西に長い長大な建物が見つかっています。

正倉と正殿の間には建物址がまとまっており、宿泊施設の館や、給食施設の厨が存在していたと推定されました。

グラウンド南東の道路の交差点における歩道の整備の際に行われた歩道部分の発掘調査や、グラウンド北東部の道路における発掘調査によって、発見された大きな溝が郡家の東側を区画する塀の役割を持つものと想定され、正殿と東側区画遺構の距離と西側に同距離の位置に規模は小さいものの、溝が確認され、西側の区画遺構と推定されました。

南側、北側の区画遺構は見つかっていません。



倉庫（総柱建物）：5.4×6.5m 4棟確認 長大な建物 4.4×30m以上 性格不明

近年の調査によりわかってきたこと

1 正殿を囲む脇殿が左右対称ではなく、西脇殿が東脇殿より小さかったことがわかりました。

2 館・厨と想定された建物群が西側にも存在していることがわかり、建物周辺から「厨」と墨で書かれた土器が発見され、建物群が厨の可能性が高まりました。

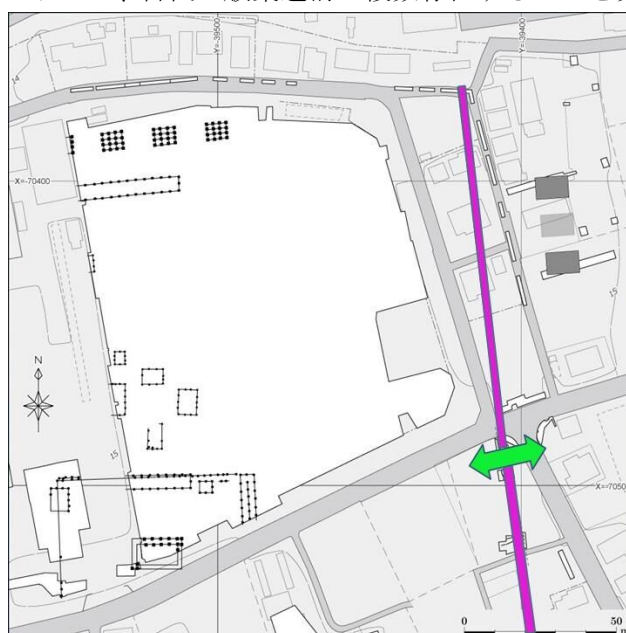
3 郡家推定東側区画遺構より外（東側）において、古代の版築遺構が複数存在することを発見しました。

4 郡家推定東側区画遺構の出入り口部を発見しました。

5 郡家推定東側区画遺構より外（東側）において、区画遺構と近似した溝を発見しました。

6 郡家の立地する高台の地形において、郡家東側の南部が 1707 年以前に奥行き約 1.5m、高さ約 20 cm の階段状に約 50m の距離の間を掘削されている可能性を確認しました。

7 正殿南側の道路部分において、整地の可能性の高い土層を確認しました。



区画遺構と出入り口部

新しい謎

1 なぜ脇殿が左右対称ではないのでしょうか？左右対称でないということはなんらかの機能が必要だったからではないのでしょうか。どのような機能のために対象ではない形にしたのでしょうか？

2 厨の墨書土器が出土した近くの建物は郡家内で確認された中では柱穴の大きさが最大級、主屋部分も最大級です。この建物が厨だったのでしょうか。

3 これまで想定していた郡家の範囲の東側に正倉群が存在する可能性が高まってきました。出入り口部は、郡家の中と外を行き来する空間ではなく、正倉域との行き来のための空間だったのでしょうか。

4 これまで高座郡家の見つかった地形（遺跡）からは、郡家廃絶後の内容は近世以降の耕作ぐらいで、中世の遺構や遺物はほとんど見つかっていません。地形を階段状に掘削する行為は、いつの時代になんのために行われたのでしょうか。

5 正殿南側の整地は、なんのために行われたのでしょうか。通路でしょうか。なにかしらの行為の場でしょうか。

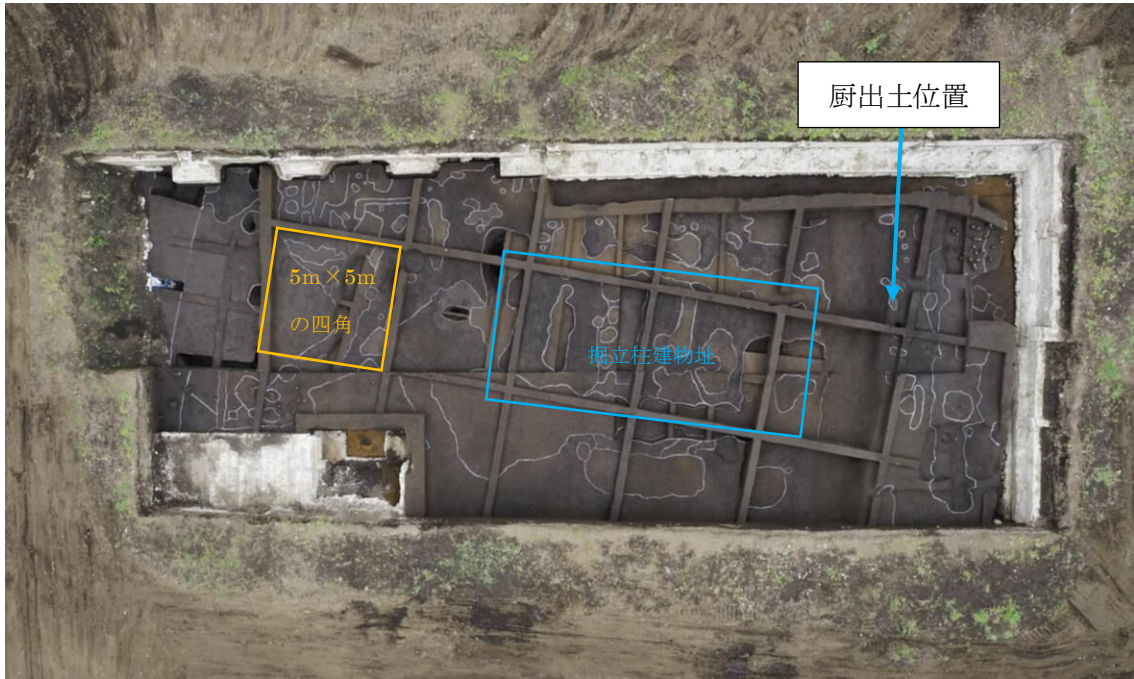
6 本当の東側区画はどこなのでしょう？これまでの発掘調査成果と昔の地図から、宇西方の範囲と一致するのではないのでしょうか。詳しくはスライドにてご説明します。



鳥瞰写真で見る指定前の下寺尾官衙遺跡群の景観（西から）



郡家東側区画遺構の出入り口部（東から）



2023年9月撮影 掘立柱建物址と厨出土位置（上が北）



2023年9月撮影 鳥瞰写真（北東から）